

=====
GCOE NewsLetter
[No.26 2009/11/25]

次回のオープンレクチャーについて
gCOE講演会（ヒューズ教授、ヴィヴェス准教授）の要約
第22回オープンレクチャーの要約
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告
=====

■ 次回のオープンレクチャーについて

次回の開催は12月16日（水）になります。詳しくは今後、GCOEのWebページでお知らせします。

■ gCOE講演会の要約

講演者：ジョージ・ヒューズ（元東京大学教授）
題目：“England and Englishness: The Modern Problem of an English Identity”（イングランドとイングリッシュネスー 近代におけるイングリッシュ・アイデンティティの問題）
日時：2009年11月12日（木）17時30分～19時
場所：文学研究科130会議室

イギリスで1992年に総選挙が行われた際、保守党のジョン・メイジャー首相が演説で引用したのは、ジョージ・オーウェルの「イングランド、君たちのイングランド」であった。苦くて生ぬるいビール、緑の芝生、露骨で芸のない広告、不格好だが物腰柔らかな人々、そうしたものに囲まれた日常生活こそイングランドであると謳ったエッセイである。それを引用することでメイジャーはEUに批判的な保守党の政策を印象づけようとしたのだが、意に反してももの笑いの種になってしまう。オーウェルの社会主義は保守党の政策とは相反するものであったし、そもそも多文化・多
人種共存が明らかになっていった1990年代には「イングリッシュネス」の概念自体まったく見当はずれのものになっていたのである。メイジャーは1940年代におけるテキストとコンテクスト両方を誤読することで、1990年代に滑稽なメタ・テキストを生み出してしまったのだ。

オーウェルが「イングランド、君たちのイングランド」を書いた1940年は第二次世界大戦勃発直後であり、「イングランド」という国土と風土への郷愁が愛国心とと

もに極度に高まっていた時代である。それは実は大英帝国という巨大に膨張した過去の遺産が衰微と崩壊の過程にあり、人々がアイデンティティの危機を感じていたことの裏返しでもある。オーウェルの描いた「イングリッシュな」庶民生活は、現実には存在しないベネディクト・アンダーソンが言う「想像の共同体」であり、オーウェル自身もそれを承知していた。同時代のBBCやタイムズ紙などのメディアにおいても、イングランドが固有の風土に育まれた特異な文化と精神性を保有しているというテキストが多用されることで、架空の「イングリッシュ・アイデンティティ」が共有されていくことになった。グレアム・グリーンの「地図なき旅路」（1936年）や「無法なる道」（1939年）、アイルランド出身の詩人ルイ・マックニースのテキストにおいてさえ、うらぶれて無秩序なロンドンの街並み、卑俗な鉄のトンネルの描写を通した「イングリッシュ・アイデンティティ」の構築が見られる。1990年代のイギリスにおいては、イスラム教徒を含めたさらに多様な人種と文化の共存が始まっていたのであり、オーウェルの描いた「想像のアイデンティティ」は明らかに共有されることのない架空のテキストでしかなくなってしまっていた。1940年代の「イングリッシュネス」は時代のコンテクストにより生み出され、テキストが構築し、さらにメタ・テキストを氾濫させていったのである。

（文責・大石和欣）

講演者：ヴァンサン・ヴィヴェス（フランス・プロヴァンス大学准教授）

題目：「マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボー、ロートレアモン：19世紀における詩的言語革命」

日時：2009年11月17日（火）17時～18時

場所：文学研究科大会議室

フランスにおけるロマン主義は、18世紀の啓蒙思想的な価値観へのアンチ・テーゼとして始まり、ヴィクトル・ユゴーらの第2世代の作家たちによって、文学、絵画、音楽など分野を横断する運動として確立していった。こうしたロマン主義の展開は、常に政治情勢の変革を画期として推移している。第2帝政成立前後から、ロマン主義が標榜していた世界の再詩学化や再キリスト教化に反対して、そして軍や教会によって作り上げられた社会秩序に反対して、フロベールやマラルメといったロマン主義から距離をおく作家や詩人が登場する。この新しい世代、特に詩人たちは、反抗と無神論と厭世主義とに突き動かされてロマン主義的な価値観や審美観を攻撃し、ことばや美学の体制を覆すことを目論んだといえる。

ステファン・マラルメは、ロマン主義的な詩人が神からの啓示を受けて詩作を行っていたのに対して、神なき「無」からの詩作をめざし、それにより詩学自体を彼の詩のテーマとするにいたる。こうしてマラルメは詩のその意味よりもむしろ、詩のリズムや音楽性や織り目を重視するようになるのである。こうしたマラルメ詩の特徴は『骰子一擲』（1914）で最も顕著であるといえる。

ポール・ヴェルレーヌは、その攻撃性においても理論的貢献という観点においてもマラルメに比肩しえないものの、やはり詩作を通じて世界の革新を目指していたといえる。ヴェルレーヌは、世界を前にしたためらいや不安を、ささやくようなピアニッシモでアドルノ的な意味での感受性を作品化する。こうした特徴は、『艶なる宴』(1869)や『言葉なき恋歌』(1874)において顕著である。

ロートレアモンは『マルドロールの歌』(1874)において、叙事詩や教養小説を下敷きにしながらも、西洋文化の基層をなす作品をパロディー化する。この作品は変幻自在に形式を変えながら、彼の同時代人たちが共有するような非人間的な価値観に基づく人間性の醜怪さを表現することで、恐怖として神を描くとともにあらゆる既存の文学的価値に批判を浴びせかけているのである。

アルチュール・ランボーは若くして筆を折り、詩をパロディーとすることでそこに意味を付与したといえよう。ランボーの詩はことばが詩へと変わっていく様を、力強さと自由さによって表現している。『地獄の季節』(1873)では、サタンをモチーフにするが、それはサタン(diabolos)の語源的な意味がしめす遊離や分散、あるいはシニフィアンとシニフィエによって内的に生成される関係性を根拠にした記号としてのsym-bolonに対するdiabolosを表現するためであり、詩作の持つ力強さを表現するためである。繰り返される自らの作品からの引用もまた、既存の詩的価値への批判であるとともに同一の感情の再現としてとらえることができるものであって、それは批評によっては捉まえることができない詩の力強さを自由に表現しているといえる。

こうした革命的な詩作品の登場は、歴史のある時期に集中してみられるが、これは社会的に抑圧された時代の終わりへと連動しているであろう。ロマン主義者たちがキリスト教とユートピア的社会主義の枠組みで行った「歴史」の変革だったとすれば、ポスト・ロマン主義の詩人や作家の試みはひとつの詩学の可能性の追究という域を出ていなかったのである。

(文責・重見晋也)

■ 第22回オープンレクチャーの要約

2009年11月18日(水) 18:00~19:15 名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：ヴァンサン・ヴィヴェス(プロヴァンス大学准教授)
題目：「ロマン主義：哲学と美学」

19世紀フランスにおける最も重要な知的運動として知られているロマン主義は、主として文学・絵画・音楽における運動として知られているが、それはまた哲学や科学(特に生物学、数学、化学)における運動でもあった。

ロマン主義運動は決して均質な継続した運動だったわけではなく、本来的に18世紀の啓蒙思想に対する政治的・哲学的な反発として、特にフランス革命の理念に対す

る反発に端を発している。フランス革命は、神の恩寵を受けているはずの国王を殺害したが、この残虐な事件は唯物論的な考え方や人間の本性や関わり合い方の質に大きな変革をもたらしたといえる。「神の殺害」というこのトラウマこそが、ロマン主義の作家や思想家たちに大きな影響を及ぼした。

哲学者としてはドイツのエマニュエル・カントやイギリスのエドモンド・バークらは、各人異なるやり方ではあったものの、それまでの「美(Beauty)」という概念に代えて「崇高(Sublime)」という新たな美学観念を生み出した。18世紀後半においては人間が自然を統制できると考えられていたが、ロマン主義において人間は自然の支配下にあるもの、宇宙(Cosmos)の一部をなすものと考えられるようになる。テオドール・ジェリコの作になる『メデューズ号の筏』はその好例であろう。こうして人間は、「純粋な知性」において定義されるのではなく、「感性」に基づいて定義されるようになるのである。

ところで、フランスから他のヨーロッパ諸国に目を移すと、フランス革命も啓蒙思想も合理主義もすべてが戦争をコノテーションとして持っていた。そこからフランスに対する祖国愛、フランス革命に対するカトリックという政治的構図を読み取ることができる。一方でフランスにおいては、ルネ・ド・シャトーブリアンが『キリスト教精髓』を発表し、イエスの名を借りてフランスに王政の復興を主張したように、ロマン主義は復古的なものとして受け取られたが故に、ナポレオン1世の失脚まで受け入れられることはなかったのである。

しばしばフランス・ロマン主義は、ユゴーの演劇作品に見られるような異種交配であるといわれる。こうした現象は作品のジャンルの混合や両性具有的登場人物などに見られるが、これはロマン主義があらゆる事象の制限なき交流を表現しようとするからに他ならない。文学作品においてはシャルル・ボードレールの『悪の華』などが代表例だが、音楽作品においてもフレデリック・ショパンやエクトル・ベルリオーズの『ファウストの劫罰』などで顕著な手法である。すべての要素が物質的特性も含めて連関(concatenation)しているという考え方こそが、フランス・ロマン主義の基底をなしているといえよう。

(文責・重見晋也)

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第16回ブリーフィング (2009年10月22日)

谷部真吾「行為と伝承 ―見付天神裸祭における行事構成の分析を通して―」

本発表では、静岡県磐田市で行われている「見付天神裸祭」を事例として、この祭りを構成する諸行事を分析することで当該儀礼の特徴について考察した。見付天神裸祭は、磐田市の北部に鎮座する矢奈比賣神社(通称:見付天神社)の例祭である。この祭りは、2000年12月に国の重要無形民俗文化財に指定され、現在28町内が参加

し、腰蓑をつけた男性たちによって勇壮な行事が繰り広げられている。この祭りの行事は、大きく4つに分けられる。それは、①祭事始（大祭7日前）、②浜垢離（大祭3日前）、③御池の清祓（大祭前日）、④御大祭（大祭当日）の4つであるが、このうち①～③までは、その行事の形態からいって、見付の町中や参加者、さらには神社境内を祓い清めるための行事であることは明らかである。また、④の御大祭における主要行事は、腰蓑をつけた男性たちが見付の表通りを行き来する「道中練り」と、彼らが見付天神社の拝殿に飛び込み、その中で体をぶつけ合う「鬼踊り」の2つであるが、これらの行事の持つ意味は明治期に書かれた記述や祭りの中で唱えられる祝詞からすると、陰陽道の技の1つである反閔であろうと推察される。こうした分析からすると、見付天神裸祭とは、この祭りに関わる人々や空間（境内および町中）を何度も祓い清めた上で、氏神を渡御させ、氏子域に祝福を与える祭りであるということができよう。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

台湾・清華大学での講演と学術交流協定の打合せ
重見晋也（gCOE技術統括責任者・電子テキスト学）

11月3日から5日まで、台湾・清華大学からの招待で、昨年12月からほぼ1年ぶりに同大学を訪問し、講演を行うとともに、最終段階に入っている学術交流協定について打合せを行ってきました。

講演は11月3日より、“**Concept of Textual Configuration and its Protexts**”と題して行いました。開催通知の公示から1週間程度の短い周知期間でありなおかつ授業時間中の講演会ではありましたが、張維安清華大学人文社会学院院長をはじめとして教員・学生15名程度の参加を得ました。講演は、題目にあるとおり、テキスト布置の考え方を中心にしてグローバルCOEにおける研究を紹介する内容でした。参加した教員および学生からは活発な質問があり、質疑応答だけで1時間を超えるものとなりました。特に、社会学を専門となさっている張院長からは、マックス・ウェーバーにおけるテキスト布置的概念について興味深い示唆がありましたし、台湾文学を専門とする若手研究者からは、文化的ファクターをどのように取り入れるのかなど、踏み込んだ質問が寄せられました。一方で学生からは、グローバルCOEプログラムの教育事業に関連して、授業の内容や指導方法など、実践的な観点からの質問が寄せられました。

学術交流協定については、張院長に加え前人文社会学院院長で台湾の最高学術機関である中央研究院のメンバーで訪問時に行われていた学長選挙の候補者でもある黄一農教授とも懇談し、学術交流協定の締結と今後の活発な学術交流について話し合い、早期実現を目指すことで意見の一致をみました。両大学の交流を促進するために、清華大学から研究者を招聘し、グローバルCOEで講演会を催したいと申し出

たところ、張院長からは黄教授をご推薦いただきましたので、11月中旬に正式な招聘要請を出す予定にしています。

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年12月中旬を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.26

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....